

クラウドの本質と普及シナリオ 劇的コスト削減の衝撃

クラウドコンピューティングの本質とは、巨大な規模の経済性がもたらす劇的なコスト削減である。当然、企業にも計り知れないインパクトを与えていくが、それはいかなるシナリオでだろうか。

文 太田智暁(本誌)

「クラウドコンピューティング」という言葉が世に初めて姿を現したのは2006年8月のこと。グーグルのエリック・シュミットCEOがカンファレンスで使ったのが最初とされている。それから約2年半。今やクラウドコンピューティングは、ICT業界における最重要キーワードとなっている。一体なぜ、これほどまでにクラウドコンピューティングに注目が集まっているのだろうか。まずはこの点からおさらいしていこう。

「電気」と同じ道歩む

クラウドコンピューティングとは、ネ

ットワーク図などでインターネットのことを雲(クラウド)の絵で表現することに由来する言葉である。雲の向こう側で行うコンピューティングだから、クラウドコンピューティングというわけだ。そして、雲からは雨が降るように、クラウドコンピューティングではネットワークを介してさまざまなサービスを利用できる。



代表的なクラウドサービスとしては、メール、文書作成、表計算などの機能をWeb上のサービスとして使えるグーグルの「Google Apps」や、アマゾンのデータセンターのCPUリソースを従量課金で利用できる

「Amazon EC2」、同じくアマゾンのオンラインストレージサービス「Amazon S3」などを挙げることができる。

こうして見ると、クラウドコンピューティングとは、ソフトウェアをネットワークサービスとして利用するSaaS (Software as a Service) や、コンピューティングリソースを水道やガス、電気のように従量課金で必要な分だけ利用できるユーティリティコンピューティングを単に言い換えただけとも思えなくもない。だが、ガートナー ジャパンの田崎堅志バイスプレジデントは重要な違いがあると指摘する。

ガートナーの定義では、クラウドコンピューティングは大きく次の3つの特徴を備えている。それは、極端なスケーラビリティ、インターネット

図表1 ここ1年のクラウドコンピューティングをめぐる主な動き

08年3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	09年1月	2月	
<p>「Google Apps」の提供開始</p> <p>「Google Apps」の提供開始</p> <p>「Google Apps」の提供開始</p> <p>「Google Apps」の提供開始</p> <p>「Google Apps」の提供開始</p>	<p>KDDIがSaaS型グループウェア「Business Outlook」の提供開始</p>	<p>NTTがセールスフォースドットコムと提携</p>	<p>NTTコミュニケーションズがSaaS基盤サービス「BizCity for SaaS Provider」を開始</p>	<p>AT&Tがクラウドサービス「AT&T Synaptic Hosting」を発表</p>	<p>IBMがクラウド事業を強化する戦略を発表</p>	<p>「Amazon EC2」に対応</p>	<p>「Amazon EC2」に対応</p>	<p>マイクロソフトがクラウド用OS「Windows Azure」を発表</p>	<p>HPとネットスイートがクラウド型中小向けSaaSで提携</p>	<p>「Google Apps」導入</p> <p>富士ソフトが従業員約1万人に「Google Apps」導入</p> <p>IBMがクラウド型コラボレーションサービス「LotusLive」発表</p> <p>「LotusLive」発表</p> <p>NTTとマイクロソフトがSaaS over NGNでの戦略的協業に合意</p> <p>「Google」と「Salesforce」がクラウド分野での提携拡大</p>	<p>ソフトバンクIDCが中小向けSaaS「NOAH」を開始</p>	<p>LotusLiveの画面</p>
		 <p>会見で握手するセールスフォースの宇陀社長とNTTコムの野村副社長、NTT持ち株の端山チーフプロデューサー</p>				 <p>Amazon EC2のWebサイト</p>						